

更地の隣人

平松
れい子

【人物】

● 旅本太郎たびもと……………地盤研究所・研究員

● 繚乱スミエりょうらん……………太郎の引っ越し先の隣人

● 旅本永遠江とわえ……………太郎の行方不明の妻

● 繚乱日枝流りょうらんひえ……………スミエの行方不明の夫。無線技士

● 咲坂紛子さきかまきこ……………太郎の上司

・ 社会援護職員

・ メール便の男

・ 参列者

・ 水先案内人たち（物語の外の世界にいる人）

太郎「そう、指数の基準から……」
咲坂「足がとられちゃう？ うん……」
太郎「湿気も関係してるしな……」
咲坂「サイドゴア？」
太郎「60超えないように……うん」
咲坂「へーそうなんだ……」

咲坂、電話しながらも太郎に気づき

咲坂「（電話相手に）あ、ちよつと待って（太郎に）太郎」
太郎「（電話相手に）あちよつとごめん（咲坂に）はい」

互いに、電話中だが、相手を待たせて話す。

咲坂「また引越すんだって？」

太郎「あ、はい」

咲坂「大変だなあ」

太郎「……まあ」

咲坂「そっか……」

太郎「どうせ身ひとつですし」

咲坂「……この出勤も大変だろうし、しばらくリモートでもいいからね」

太郎「……ありがとうございます」

咲坂「（電話相手に）え？もつと安いのあるんじゃない？」

太郎「（自分に話しかけてると思ひ）家ですか？」

咲坂「（電話相手に）でも高い靴買ったとくと、雨でももつからねー。まあ今どこも高いからなあ。やっぱサイズか……」

太郎、咲坂が電話していると気づき、自分もと戻る。

太郎「（電話相手に）ごめん、はいはい……うん、ああ……」

二人、互いの電話相手と会話を続ける。

咲坂「え、そうなの？ わーもう勘弁……え、知ってる？ 昨日国交省が出した通達さ、うちの土砂崩れ予報、またリリース延期だつて」

太郎、自分に向けられているかどうか咲坂の顔を窺う。

咲坂「土砂崩れ予報」

太郎、自分に話しかけていると認め

太郎「ああ、え、うちの地盤研究所で開発してる土砂崩れ予報？」

咲坂「的中率低いからリリース延期だって」

太郎「またですか」

咲坂「もう勘弁だよねー」

太郎「ほんと、どこまでやればいいのか」

咲坂「そろそろリリースしてもいい頃だと思っただけだなー」

太郎「もういいでしょう。天気予報が当たらないことあるんだか

ら、土砂崩れ予報だって、そりゃ当たらないこともありませよ」

咲坂「だよねー。うん…：：：結局余るわけよ、かかとの部分が」

咲坂はしかしし電話相手に話しているようであると判断した太郎、自分もと、電話相手に戻る。

太郎「（電話相手に）ごめん、はいはい…：うん、ああ…：」

咲坂「そうよ、うん…：：うん。いやーそれもあるけどねー…：うん。え、どの辺に引越すんだって？」

太郎、再度自分に向けているかどうか咲坂の顔を先ほどよりさらに慎重に窺う。

咲坂、太郎の顔を直視。

咲坂「引越し先」

太郎「あ（咲坂に）カスミヶ丘エリアです」

咲坂「カスミヶ丘か…：あそこハザードマップで警戒区域なんじゃないの？」

太郎「また、すぐ引越しますし」

咲坂「そっか。大規模土砂崩れがあった鬼子母神エリアの近くだよね」

太郎「ええそうです」

咲坂「鬼子母神エリアさ、まだ結構な数の骨が埋まってるみたいだね」

太郎「ええ」

咲坂「早く見つかるといいね。奥さん」

太郎、ただうなずく。咲坂もうなずき、再び電話相手に話しかける。

咲坂「きつと見つかる。……きつとあなたにぴったりの靴見つかる
って、うん……うん」

太郎、自分の電話相手の会話に戻る。

太郎「ああ、ごめんごめん……」

壁のあたりが消えていき、薄明かりの中、ラジオの声。
『では、今週のテーマ、やらかしましたエピソードのご紹介
です。ラジオネーム水玉ポルカさん、私は今日、給水所に行
った時やらかしました。十リットルのタンクを持って行き、
やっと入れ終わったと思って……』

○カスミヶ丘の長屋

舞台全体が明るくなると、二つの狭い部屋。

部屋は、中庭をはさんで斜めはす向かいに並んでいる。

どちらの部屋も、テーブルと椅子だけの簡素な部屋。

それぞれ『い』『ろ』と書かれたドアらしき枠。

中庭には小さな井戸や、転がった椅子がある。

上手の『ろ』の部屋からトランプのカードを切る音が鳴り響
いている。

無線機を前に座る繚乱スミエ。

手元の赤いトランプで占いをしながら、結果に反応しつつ逐
一機器に向かって話し、実況している。

(スミエの実況の途中で太郎入ってくる)

スミエ「で、まあこのアパートもいの渡部さんも出てかれて、はの
杉崎さんもういないでしょ、ほの鷺田さんもういないでし
よ、閑散？ ですよねこも。あ、ダイヤの7。待ち人こず。く
っそー。あ、で、ついに私一人か？ この長屋に私一人か？ 世
界に私一人か？ って」

中庭を野良犬が通っていく。

世界の外側に居る水先案内人による野良犬。

スミエ「あ、野良犬」

スミエ、窓の外をのぞく仕草。

スミエ「柴犬？ていうのかな、大きめの。昨日も通つてったやつ、ですね。かつては優しい飼い主さんに飼われてたんでしょうなあ」

水先案内人の犬、何かを漁る。

スミエ「あー漁ってる漁ってる、（犬に対して）なんもないよ、そうそう食べ物は何もないよここはねー昨日も何もなかったでしょう、学習しよーねー（そうだ）可哀想な君に名前をつけてしんぜよう、んーなにがいいかな？あ名前募集しよっかな、スピードの12、孤独の一途、ちよ何い？！もうー」

トランプを一旦やめる。

スミエ「うん募集しよう、柴犬ちゃんの名前募集〜！」

犬、去って行く。

スミエ「どつぐねーむ、ぷりーず。あれ、あー行っちゃった、柴犬行っちゃった。あ、でも、募集します、明日もきつと来るから。柴犬ちゃん、このカスミヶ丘長屋の、我が『ろ』の部屋の横を通り過ぎる、柴犬の名前募集〜、どつぐねーむ〜 コールブオードッグネーム。誰か応答願います…CQ、CQ…:…:」

スミエ、突然ボタンと大の字に横になる。

天井を見つめるスミエ。頭を指で掻き、頭皮の匂いを何度か嗅ぐ。おもむろにまた立ち上がり、引出しからオセロを取り出し

スミエ「は〜いたかがオセロされどオセロ。この長屋に私一人世界に私ひとり孤独ですけど何か？な私ですけど、このオセロがあれば孤独じゃない！はい白先行。次が、黒！」

スミエ、オセロを一人でやりながら、実況している。

二つの部屋のあいだにある中庭。

その中庭の奥から、トランプをガタガタと引いて舞台上に現れる太郎。ドアに書いてある文字を確認している。

太郎「い…ろ…:…:は…:…:に…:…:ほ…:…:」

太郎、『ろ』のドア越しに耳を傾けスミエの声を聞く。後ろを振り返り、『い』と書かれた下手側のドアを指さし確認し、中へ入っていく太郎。

いの部屋。

入ってきた太郎、トランクの荷物を開ける。

マトリョーシカを取り出し、テーブルに置く。

マトリョーシカの顔の部分は男児の顔写真になっている。葉の瓶も取りだし置く。

思い立って立ち上がりドアをそっと開け中庭へ出る。

中庭に出た太郎が長屋の中庭の様子を眺め、倒れた椅子を並べたりする。

その間じゆうずつと『ろ』の部屋から、漏れているスミエの実況の声が聞こえている。

太郎「い……ろ……は……に……ほ……」

似たような建物が並んでいる中、ドアに書かれた『い』の文字を、指さし確認し、再び部屋へ入る太郎。

いの部屋に太郎入り、座る。

先程置いたマトリョーシカのところには、旅本永遠江が座っている。

太郎「ひゃあつつつ」

小刻みな荒い呼吸を鎮めようと、胸に手をあてる。

気づくと永遠江は消え、元のマトリョーシカ。

太郎「くっそ。ドッキリかよ。生きてんじやねえだろうか？」

中庭を、水先案内人が扮する鹿が通り過ぎる。

太郎、鹿の通り過ぎる音に驚き、窓の外を眺める。

ろの部屋のスミエも、窓の外を眺めている。

スミエ「あ野良鹿……早い、鹿早い、もー行っちゃった。おー」

鹿が去って行く。

スミエ、無線機の前に戻り

スミエ「あれの名前も募集しようかなー、でもあれはもう明日は来ない気がするな。明日もし来たら、鹿の名前も募集しよう、うんそうしよう。でも名前つけたら食べられなくなるっていうらしいしなー。やめとこかな、うんうん」

太郎、スミエの部屋の前に来て、ドアをノックする。

スミエ「…誰か来た…。多分…：…人間…だと思えます。中庭に一人、誰か、いるみたいですよ。えお隣さん？え？誰か引越してきたかな、とりあえず、出てみるつきやないですかねこれは。出てみます」

スミエ、扉を開け太郎を見る。

太郎「こんにちは」

スミエ「男の人っぽい、てゆうか男。あどうも」

スミエは実況を続けながら、太郎に應對している。

太郎「え？ あ、すいません。あの、今日、『い』の部屋に、あの隣『い』でいいですよね？『い』に引越してきた者でして、あの挨拶がまだだったんで、こんにちは、あ、こんばんは、かな」

スミエ「やつぱり引越しの挨拶です。眼鏡かけた人で、こんにちは」

太郎「あの、これ、つまらないものですが」

タオルを差し出す太郎。

スミエ「あど定番。まあ引越しと言えばタオルをご近所にとというのが定番中の定番ですけど、あれ何ですかね？ あ、どうも」

受け取るスミエ。

スミエ「何か？」

太郎「…：…っと、あのですね、これは息子で…この女の知りませんか？」

太郎、手に持っている、男児の顔のマトリョーシカを開け、中から永遠江の顔の写真またはマトリョーシカを取り出し、スミエに差し出して見せる。

スミエ「（見ながら）え隣人にマトリョーシカ見せられてるんですけどこれはどうしたものでしょうか」
太郎「鬼子母神エリアに住んでたんです」
スミエ「あ、私もです。二年前土砂崩れがあつて、それで、ここに越してきました」
太郎「じゃ僕と同じですね」
スミエ「そうなんですわね」

マトリョーシカを見せながら

太郎「あの…行方不明…なんですすよねー」
スミエ「行方不明…」

スミエ、マトリョーシカの写真をじっと見つめ首を傾げる。

スミエ「…あれ？待ってください…なんとなく、見たことがあるよ
うな」

太郎「ある！？いつ見ました？生きてるんですか？」

スミエ「あいえ、見たことが何となく」

太郎「何となく？」

スミエ「あるよな」

太郎「あるよな?!」

スミエ「ないよな」

太郎「ないよな!？」

太郎のリアクションを不思議そうに見るスミエ

スミエ「あの、もう少し何か手がかりありませんか？」

太郎「んー…：…：髪は肩ぐらいで、面長で、ちよつと北国っぽ
い感じで…：…」

スミエ「北国っぽい感じ…：…」

スミエ、マトリョーシカの顔写真を一生懸命見つめる。

太郎「来ませんでしたか？この辺に」

スミエ「…もう少し特徴があれば」

太郎「特徴？」

スミエ「ええ特徴」

太郎「んー…：…：これといって特徴、ないんだよな…：…：わかりま

した。何か特徴を思い出したらまた、伺います」
スミエ「奥さん：ですか？」

おもむろにうなづく太郎。

スミエ「：それは、お気の毒なことで」

太郎「（お辞儀をし）何か思い出したらまた。失礼します」

太郎、自分の部屋へと去っていく。

スミエ「：：：失礼しますとってお隣さんは出て行きました」

中庭で自分の部屋に戻ろうとした太郎、井戸に気づく。

近づき、井戸についている取っ手のようなものを上下にして
みるが、水は出ない。左右にも何度かやってみるが、水は出
ない。

スミエが部屋の中から、窓外の太郎を覗く。

太郎、井戸の水くみを諦めて、部屋に戻る。

部屋に戻った太郎、椅子に座り、テーブルにうつ伏せ眠る。

○回想・三年前の鬼子母神・太郎の部屋・リビング

音楽と共に現れる水先案内人たち。

壊れた折り畳み傘の骨とL字の金属ワイヤー、赤ん坊のおく
るみの布が飛んでいる。

蠢く案内人に囲まれ、永遠江が座っている。

永遠江「どうしよっか？」

うつ伏せていた太郎、眠そうに顔をあげる。

太郎「何が？」

食卓で食べている二人。

永遠江「明日の誕生日。瞬の」

太郎「ああ、どうしようか」

永遠江「ロールサンドはどうかかな？」

太郎「ロールサンドね、いいんじゃない」

永遠江「チーズと海苔とーあと柴漬け足してー」

太郎、食べながら赤ん坊のおくるみに気づく。

太郎「あれ、食事はやらなくていいの？」

永遠江「いいのよ。だってホラ、もうこれだもの」

布の塊が、太郎の目の前に押しつけられる。

太郎「うあああ」

永遠江と水先案内人たち、音楽とともに消える。

○元のカスミヶ丘の長屋

スミエの部屋の無線ノイズが鳴っている。

蘇る記憶にうなされて起きた太郎。

ビビって、心を取り戻そうとするその動きは不随意運動のよ
うに素早く不規則に繰り返される。

薬の瓶を開け、残り少ない薬の粒を飲み込む。

水が数滴しかないペットボトルの水を流し込む。

水が少なく、むせながらも薬を飲み込み、心落ち着かせる太
郎。

部屋を出て行き、スミエの家のドアをノックする。

スミエ「誰か来た…。多分………人間……だと思えます」

スミエドアを開けると息を切らしている太郎。

太郎「あの、思い出しました、他に特徴」

スミエ「は？」

太郎「髪は肩ぐらいで顔はいつも暗い感じで、面長で、あといつも
わりと上下地味な服着てたんですね。茶色とかグレーとか。外
でるときも」

スミエ「ああ」

太郎「でこういうメシの食い方、こんな感じ（やってみせ）」

スミエ「はあ」

太郎「どうでしょう？ 見覚えありませんか？」

スミエ「んー…見覚えあるような」

太郎「あるような？！」

スミエ「ないような……」

太郎「（舌打ちし）どっちなんだよ」

スミエ「……は？」

太郎「あ、すいません」

スミエ「……あのうすいません、結構部屋をがたがた音させてるみたいなんですけど、この長屋、傾くんでやめたほうがいいですよ。と私はお隣さんに」

太郎「がたがた？」

スミエ「がたがた何してるんです？　って聞いてみました」

太郎「過敏すぎるんじゃないですか」

スミエ「喋ると鼻がカピバラっぽい。響くんですよ、がたがた隣に」

太郎「じゃあ仮にわかりました。でも、あなたその……（部屋の中を覗き込んで）無線ですか？　何なんです？　誰と会話してんのか知りませんが、それもところどころ、いの部屋に響いてますよ」

スミエ「超短波無線です」

太郎「超短波？」

スミエ「短波は妨害電波が多いから。と、私は答えましたけど、さあ、目の小さい人は何と答えるのでしょうか」

太郎「は？」

太郎、呆氣にとられる。

太郎「あの、え今誰と話されてるんですか？」

スミエ「（太郎を指さし）あなたですよ。（別の方向を指さし）あなたですよ。（また別の方向を指さし）あなたですよ」

太郎「……え」

スミエ「CQCQは、不特定多数に向けた発信でことですよ」

太郎「ちよつと大丈夫ですかあなた？」

スミエ「何がですか？　と私は」

太郎「なんで不特定多数に向けて発信をされてるんです？」

スミエ「……その必要があるからです」

太郎「どんな必要があるんです？」

スミエ「あなたにそれを答える必要が？　と私は」

太郎「そんな話し方をいちいちされてるとこつちも話にならないんで」

スミエ「あの、すいませんちよつと私、今忙しくて」

太郎「何に忙しいんです？　手伝いましうか」

スミエ「あなたには関係ないことです。忙しいにはいろんな意味があるってことをもうこのお隣さんはどうも理解できない模様」

太郎「あのほんと大丈夫ですか？」

スミエ「大丈夫ですよ」

太郎「そうですか」

スミエ「そうですよ。失礼します」

太郎「あの」

スミエ、ドアをしめる。

スミエ「と私はドアを閉めてやりました」

ドアの前で立ち尽くし、首を傾げる太郎。

太郎「……（小声で）へんなヤツ」

窓から、部屋にいるスミエの様子を確認しようとする太郎。
一人でオセロの続きをし始め水を飲むとしてペットボトルを口にあてるが、ほとんど空で、最後の一滴の水を舌におとし飲むスミエ。

太郎「（小声で）どこが忙しいんだよ……」

スミエ突如立ち上がり窓に向かってくる。逃げる太郎。

太郎「変な女」

スミエ「変な男」

太郎、自分の部屋へ戻る。

中庭。

スミエが中庭へ出る。ペットボトルを持って井戸の近くへ行き、取っ手を操作すると簡単に水が汲みあがる。
ボトルに汲み入れた水を持って部屋に戻っていく。
その様子を窓から眺めていた太郎、中庭へ出る。
スミエを見習い井戸の水を汲もうとするが汲めない。
スミエは窓からその試行錯誤する様子をのぞき見ている。
スミエ、なかなか汲めそうで汲めない太郎の様子を見て

スミエ「ああ……そのやり方じゃ汲めないんですけどねー、もって右の取っ手を微妙に左に力を入れて……その取っ手を上にして右にすれば……」

太郎と一緒に体と顔が動いてシンクロしながらその様子を実況する。
太郎、実況されている事は腑に落ちないながらも、スミエのヒントに沿ってやろうとしている。
ヒントを与えているのになかなか水を汲めない太郎に業を煮やし、外へ出ようとドアを開けるスミエ。
丁度、井戸水を汲むことに成功したところの太郎。

太郎「出来た」

部屋から半身出したスミエと目が合う。

互いに、取り敢えずお辞儀する。

スミエ、ばつが悪そうに扉を閉める。

いの部屋。

太郎が部屋に入り、水を飲む。

ろの部屋。

スミエが、オセロの石を額に重ねる。

スミエ「えー、眠くなってきました。昼寝をしようと思いますが、問題は、寝覚めが悪いこと。なんで、その対応策としてですね、昼寝の前にこのオセロの石を積み重ねておでこに乗せ、起きたときに、石が落ちないように起きると目がぱっちり。または万が一落ちちゃっても、それで目がぱっちり起きれるってことで、昼寝する自分をいじめる仕掛けです」というわけで、おやすみなさい」

スミエ、体を横たえ、眠る。

いの部屋。

太郎は椅子に座り、テーブルにうつ伏せる。

○回想・三年前の鬼子母神・太郎の部屋・リビング

音楽と共に水先案内人たちが入ってくる。

壊れた折り畳み傘の骨、L字の金属ワイヤー、赤ん坊のおくるみの布が飛んできて、太郎のまわりをうごめいている。

蠢く案内人に囲まれ永遠江が座っている。
食事している太郎と永遠江。

永遠江「どうしよっか？」

うつ伏せていた太郎、眠そうに顔をあげる。

太郎「何が？」

食卓を囲んでいる二人。

永遠江「明日の誕生日。瞬の」

太郎、食べながら。

太郎「ああ、どうしようか」

永遠江「ロールサンドはどうかな？」

太郎「ロールサンドね、いいんじゃない」

永遠江「チーズと海苔とーあとぬか漬け足してー」

永遠江が声を出し、笑う。

太郎、立ち上がる

永遠江「どっか行くの？」

太郎「べつに」

永遠江「雨だけど」

太郎「そう」

永遠江「行くの？」

太郎「ちよっと」

二人、牽制し合いながら部屋を歩いたり止まったりを繰り返す。

出て行くこうとする太郎。

おくるみの布の固まりが太郎の目の前に。

太郎「ぎゃー」

永遠江と水先案内人たち、音楽とともに消える。

○元の長屋

太郎の悲鳴で目を覚ますスミエ。おでこに乗せたオセロの石を床にぶちまけてしまう。

スミエ「あーあ。CQ、CQ、こちらJA1AWP、カスミヶ丘長屋のJA1AWP。いやーまんまと自分の罫に嵌まってしまいました。でもおかげで、びっくりして起きた昼はかなりすがすがしいです」

いの部屋。

悪夢にうなされている太郎。

太郎「消えろ化け物おお！！！！生きてたのか？俺は何もしてないぞ！！！！」

太郎、激しく動揺しながら薬瓶を開け、最後の薬を、水で飲み干す。

スミエ、太郎の声に耳を傾ける。

スミエ「え何今の？（囁き声で）聞こえました？『消えろ化け物、生きてたのか俺は、何もしてないぞ』って言っていましたよね。え？これ、何か事件に関係してたり？」

太郎が自分の部屋を出て、スミエの部屋に近づいてくる。

スミエ「でもやばいやつだったらどうしよう。やばいなー」

太郎がドアをノック。スミエ、驚き

スミエ「誰か来た…。多分……………人間…だと思いたい」

スミエ、ドアを開けるとマトリョーシカを持って、立っている太郎。

スミエ「あ」

太郎「また思い出したんで。他に特徴」

スミエ「え？あ、ああ、奥さんの」

太郎「笑うと、ここに八重歯がありまして、いや、でもめつたに笑うことなんてないんだけど、普段は暗い顔してて、でもたまに笑うと、牙みたいなの八重歯があるんですよ。見覚えありませんかね？」

スミエ「（考え）あ、あるかも……………しれない」

太郎「え！」

スミエ「や、あれは角の酒屋の婆さんか、違うな」
太郎「……」

スミエ、頭を下げる。

スミエ「ごめんなさい。やっぱり見覚えありません」
太郎「じゃここにも来てませんでしたね?!」
スミエ「……残念ですけど」

太郎、安堵の様子。

スミエ「あの、奥さん、生きてるといいですね? いいですよ
ね?」

太郎「いえ。妻は……死んでたほうがいいんです」

スミエ「え」

太郎「妻が確実に死んでいるという証拠を、探してるんです僕は」
スミエ「奥さんですよね?」

太郎、話を逸らそうとしてスミエの部屋をのぞき込む。

太郎「……あれ? あ! そうか。なんだなんだ、いや誰とずっと会
話してるのかと思ってたんですよ」

太郎、スミエの部屋に置かれた写真を指さす。

スミエ「は?」

太郎「なんだ旦那さん? がいらつしやるんですね。旦那さんと話
してたんですね!」

スミエ、おもむろに写真を手にする。

スミエ「あの、夫は行方不明なんです」

太郎「え」

スミエ「夫は、どこかで生きてると、どこかで聞いててくれる
と、思っただけで発信してるんです。0・1%、0・01%か
もしれないですけど」

太郎「あ、そうだったんですか」

スミエ「(写真を見せながら)あの、どこかで見かけませんでした
か? 繚乱ヒエルっています」

太郎「繚乱ヒエル……変わった名前ですね」

スミエ「（途中から実況へ）鬼子母神エリアの土砂崩れで行方不明になってからこの二年、こうしてヒエル君捜しをしています。こちらJ A 1 A W P、今年4 1になります。中肉中背。左頬にほくろ、大きめの一重で耳も大きめ、戦争映画に出てきそうな雰囲気、緑色がよく似合う。もし見かけたとか、知ってるって人がいたら、どんな情報でも構いません」

繚乱ヒエルがスミエの部屋に現れる。

○回想・五年前の鬼子母神・ヒエルの部屋。

スミエの隣にヒエルが座っている。

音楽が聞こえている。

無線機器に囲まれた部屋。

ヒエル「C Q、C Q、こちらJ A 1 A W P、カスミヶ丘のJ A 1 W P」

スミエ「C Qって何？」

ヒエル「C Qは不特定多数の人に呼びかけるとき使うの」

スミエ「へえ」

スミエ「ね、この：短波無線」

ヒエル「超・短・波、無線」

スミエ「超短波は、短波と何か違うの？」

ヒエル「短波は使いやすいけど、妨害電波が多いから、僕は超短波

しか使わない」

スミエ「へえ：超短波」

ヒエル「遠くへは繋がらないって言われてるけど、天気次第で電離層の影響でぜったい遠くにも繋がるって思うから。それを証明したくて僕は、ずっと超短波しか使わない」

スミエ「へえ。繋がるといいね、遠くに」

ヒエル「ちよつとやってみる？」

スミエ「うん」

ヒエル、スミエにヘッドフォンをかけ、機器を弄る。

ヒエル「これで呼びかけてみて。C Q C Qって」

スミエ見よう見まねでたどたどしく

スミエ「C Q、C Q……」

ヒエル「こちらJ A……」

スミエ「こちらJ A 1 A W P、カスミヶ丘のJ A 1 A W P。私の隣にいる人は、今、何かメモしています、髪をかきあげながら、あ、今鼻の頭をかきました」

ヒエルは、うなづいて無線機をいじっている。

ヒエル「そうそう」

スミエ「あ今度は、こっちを見た」

音楽高まる。

ヒエルとスミエ、光の中。

流れ落ちる互いのぬらついた汗を受けとめ合うかのような粘性の高い戯れの動き。

土砂崩れの音が聞こえてくる。

ヒエルがいなくなる。

○元の長屋

スミエの部屋。

無線機の前に座っているスミエ。

扉の外の、座面の低い椅子に座って聞いている太郎。

スミエ「あの土砂崩れ以来、行方がわからなくて……」

太郎「それで見えたこと聞いたことをそのまま声に出して……」

写真を返す太郎。

スミエ、うなだれている。

太郎「……生きてるといいですね」

スミエ「回りからは、忘れろって言われるんですけどね」

太郎「僕もです」

スミエ「そんなの無理です」

太郎「……僕はとにかく見つけたい。葬式でも何でもして早くすつきりしたい。そのために骨を探してるんです」

スミエ「……そうですか」

太郎「ええ」

水先案内人の振らす雨がぽつぽつと太郎を濡らす。

太郎「また雨か。明日も骨探しに行こうと思ってたのにな」

構わず濡れながら座っている太郎。

スミエ「あしたには小ぶりになりますよ」

太郎「……どこかで、きつと聞いてくれますよ、その発信」

スミエ「CQ、CQ、こちらJ A 1 A W P、カスミヶ丘長屋のJ A 1 A W P。雨が降ってきました」

スミエ、取り出したオセロを椅子の座面に置いて、ドアの内側へ持っていく。

太郎「あの、じゃ僕は、これで」

太郎、去ろうとする。

スミエ「たかがオセロされどオセロ、今日の対戦相手は、お隣さん」

太郎（え？）と振り向く。

スミエ「先行は白の私。はい次は黒のお隣さんどうぞ」

スミエ、強引にオセロ盤を太郎に示す。

太郎、遠慮がちに（じゃあ）とオセロ盤を前にして座る。

まずはと黒の玉を動かす太郎。

オセロをする二人。

音楽の中、オセロを打ちながら時間が過ぎていく二人の様子をあかりの明暗転が映し出す。

スミエ「さあ白が優勢か？ おっと黒が巻き返すかと思いきや」

太郎「早いな……」

スミエ「黒、圧倒されてます、黒大丈夫か、このまま白が逃げ切るのか？」

たじたじの太郎。

早々に白玉が盤を埋め尽くし、黒の太郎の打つ手がなくなる。

太郎「参りました」

スミエ「弱い！黒のお隣さん弱いです」

太郎「だって、一人でずっとオセロやってる人とじゃあかなわないですよ」

スミエ「あ、それもそうですね」

太郎「少しは昔やってたんですけどね、僕も」

二人でラジオ番組をやっているかのような雰囲気。

スミエ「え、そうなんですか？」

太郎「ま、少しですよ。へへ」

スミエ「へえ、じゃあまた今度対戦しましょうよ」

太郎「ええ、是非」

スミエ「あ、じゃもう少し練習が必要でしょうからどうぞ」

オセロの盤ごと渡され、受け取る太郎。

太郎「……どうも」

スミエ「またスタジオ遊びにきてください」

太郎「ええ是非、(つて)や、スタジオじゃないし。だからそういうのは、ね、やめましょう」

スミエ「今日の対戦相手は、お隣『い』にお住まいの……」

太郎「あ、旅本です、旅本太郎と言います」

スミエ「お隣『い』の、旅本太郎さんでしたあ。私は繚乱スミエです」

太郎「スミエさん」

スミエ「……はい」

間

太郎「……あ、じゃあ、僕はこれで」

スミエ「はい」

太郎「どうも、お邪魔しました」

スミエ「お休みなさい」

太郎、スミエの部屋を離れる。

自分の部屋に戻った太郎。

一人でオセロを始める。

スミエ、髪の毛の寝癖をなおし、手ぐしで梳かす。

太郎とスミエ、ゆっくり立ち上がる。

同時にそつとドアをあける二人。
目が合い慌てる二人。
所在なげにお辞儀をしドアを閉める。
スミエ、無線機の前に座り一呼吸して。

スミエ「こちらJ A 1 A W P、えー繚乱ヒエルという名前の男性、
今年41になります。左頬にほくろ、大きめの一重で耳も大きめ
……」

その発信に耳を傾けている太郎の部屋のあかりが暗くなる。

スミエ「戦争映画に出てきそうな雰囲気、緑色がよく似合う……、
もし見かけたとか、知ってるって人がいたら、どんな情報でも構
いません。お知らせください」

スミエの部屋のあかりも暗くなり、闇の中、スコップで土を
掘り返す音が響く。

○更地

軍手をし、土を掘り起こしている太郎が舞台奥に浮かび上が
る。

土の表面を擦り、探している。

何かを見つける太郎、引っ張り上げると人骨らしきものであ
る。

太郎、人骨の大きさや感触、面影を確かめ、折るようにビニ
ール袋に入れる。

闇のなか、吹きすさぶ風の音。

○カスミヶ丘の長屋

中庭。

太郎がスミエに、見つけた骨を見せている。

太郎「鬼子母神、南東地区で見つけました。私の妻かもしれない
し、あなたの旦那さんかもしれない」

スミエ、骨をじっと見つめている。

太郎「全然関係ない別の人のかもしれない」

スミエ、どうかして、面影が重なるかどうか確かめようと

している。

太郎「出してみませんか？ DNA鑑定」

スミエ「そうですね……」

太郎「どう、しました？」

スミエ「どうせ違うとは思いますが」

太郎「そうですね？」

スミエ「だって夫は……」

太郎「お気持ちはわかるんですけど。念のため、鑑定しておいた方がいいということもあると思うんですけど」

スミエ「……何が必要なんですか？」

太郎「え？ 出したことないんですか？」

スミエ「ないです」

太郎「……まあ別に出さなくてもいいんですけど」

スミエ「いえ、お願いします」

太郎「わかりました。じゃご主人の何か体液がついているものはありますか？」

スミエ「体液……？」

太郎「タバコの吸い殻とか、鼻をかんだティッシュとか」

スミエ「そっちな……」

太郎「僕はへその緒がとってあるので、それで鑑定してもらってます」

スミエ「お子さんが？」

太郎「……かつて」

スミエ、歯ブラシをビニール袋に入れながら

スミエ「……これ、主人が使ってた歯ブラシ」

太郎、受け取る。

スミエ「それ……もし奥さんのだったら、どうするんです？」

太郎「どうするって……願ったり、叶ったりです」

スミエ「どうして、奥さんに死んで欲しいんですか？」

太郎、押し黙る

スミエ「奥さんですよ？」

太郎、スミエの部屋の中をのぞき込んで

太郎「あれ？ あ！そうか。それ無線機、結構いい感じの無線機ですよね、年代ものっていうのかな」

スミエ「話、それではないですよ全然」

太郎「……」

スミエ「誰かに話せばすつきりすることもありますよ。あ、そうだ。いつでも好きな時に来て、無線機使って、発信してもらって構わないんで。……その、奥さんが死んで欲しい事情とか」

太郎「（小声で履き捨て）いやするわけねえだろ。ヤあの……あなた発信の意味わかってます？ その無線を使うってことは、不特定多数の顔の見えない相手に話すってことですよ？」

スミエ「そうですね？」

太郎「パブリックに話すってことですよ？」

スミエ「そうですね？」

太郎「で、今はこの僕とあなたは個人的に、一対一で、パーソナルに話しをしますよね？」

スミエ「パブリックじゃないんですか、お隣同士って？」

太郎「は？違うし。（自問自答し）え、違うよな？」

スミエ「えどっちですか？」

太郎「違います！ だから、僕はあなたとは今プライベートに話をしていますけど、妻に死んで欲しい理由を発信なんかするつもりないってことです。……失礼します」

太郎、歩き出す。

舞台奥の左右に伸びる階段に蛍光灯のあかりがつく。

○社会援護局・事業課

社会援護局職員が、上方から声をあげている。

職員「はいお次の方に参ります。2581番の方、いらっしゃいますか？」

社会援護局職員に向かって手をあげ、階段を登り職員に近づく太郎。職員に人骨の入った袋を見せる。

職員、袋を受け取り、書類を差し出す。

職員「じゃ、2581番さん、こちらに記入お願いします。あと鑑定結果についてですけど、一致した場合のみ、職員が掘削場所を確認後、ご本人にその結果をお知らせします」

太郎「はい、わかっています。もう何度か来てるんで」

職員「あ、そうですか、それは失礼しました」

太郎、書類に記入し始める。
書き終わると、職員別の書類を太郎に渡す。
太郎、イライラするも記入し、職員に渡す。

職員「はい、じゃこちらでお預かりします。……えー次は2582番となります、2582番の方……」

太郎、職員から離れ、階段を降りてきて、長屋の自分の部屋へ入っていく。

○カスミヶ丘の長屋
いの部屋。

太郎が部屋に戻ってきて、椅子に座り、（はぁ疲れた）とテーブルにうつ伏せ、眠る。

○回想・三年前の鬼子母神・太郎の部屋・リビング
音楽と共に水先案内人たちやってくる。

壊れた折り畳み傘の骨とL字の金属ワイヤー、赤ん坊のおくるみの布が飛んでいる。
蠢く案内人に囲まれ、永遠江が座っている。

永遠江「どうしようか、明日の誕生日」

太郎「…なんでだ？」

永遠江「ロールサンドはどうかかな」

太郎「…なんで」

永遠江「チーズと」

太郎「何日も家開けたんだ？ ……そうやって一日中、瞬の誕生日の話しばかり……いい加減にやめてくれよ。なあ。もう瞬はいないだろ。瞬は死んだだろ」

永遠江「…海苔と…ぬか漬け足して…」

永遠江、笑う。

太郎、拳を握る。

太郎「（小声で）…お前が見殺しにしたから」

永遠江「どこか行くの？」

太郎「べつに」

永遠江「雨だよ？ 雨降ってるんだよ？」

太郎「そう」

永遠江「行くの？」

太郎「ちよっと」

セーターの中のブラジャーに胸を寄せてあげて納める永遠江もぐもぐ食べ続ける。

太郎、立ち上がる。

二人、牽制し合いながら部屋を歩いたり止まったりを繰り返す。

出て行こうとする太郎。

おくるみの布の固まりが太郎の目の前に。

太郎「ぎゃー」

永遠江と水先案内人たち、音楽とともに消える。

○元の長屋

いの部屋。

太郎「また出たな！ 化け物おお！！！！俺は何もしてないからな。何も！！！」

太郎、動揺を抑えようとする。薬瓶を開けるが、空である。

太郎「あー」

頭を抱える太郎。

ろの部屋。

無線ノイズが聞こえている。スミエが太郎の部屋から聞こえる声をメモしている。

スミエ「（小声でメモしながら）『また出たな。化け物、俺は何もしてないからな』……ってまた、お隣さんが叫んでいます、いやあ、お隣さん、きつと何かありますよこれは」

ろの部屋のドアがノックされ驚くスミエ。

スミエ「誰か来た……。多分………人間……」

ドアを開けると太郎が立っている。

スミエ「のようです」

太郎「あの、また思い出したんで、妻の特徴」

スミエ「……あの」

太郎「眉毛が細くて、まっすぐで、化粧で……」

スミエ「あの、もう見覚えはないって」

太郎「結構太くして……そうでしたね……すみません」

スミエ「ごめんなさい」

太郎「いえ、すみません」

長い沈黙。

スミエ「ーつと、ここは沈黙を埋めるべきでしょうか」

太郎「妻のこと忘れてたくて薬飲んで……薬飲むと忘れられるんで

すけどその薬がもうなくなっちゃって」

スミエ「そう……ですか」

太郎「思い出したくないことも思い出すようになって」

スミエ「……あの、良ければ話してみてください」

太郎「え……」

スミエ「それ」

太郎「あの……じゃあ、無線切ってください？」

スミエ「……これは」

太郎「話しますから」

スミエ、思い切り息を吸いこみ、無線機のスイッチを切る
と、無線ノイズも消える。

○回想・三年前の鬼子母神・太郎の部屋・リビング

音楽と共に、蠢く水先案内人に囲まれた永遠江。

傘が空を飛んでいる。

おくるみの布は、水先案内人により幼児の形を成し、永遠江
の回りをまとわりついている。

永遠江、鏡を見ながら化粧し、セーターの中のブラジャーを
ひっきりなしに寄せてはあげている。

永遠江「このブラ、盛れるわ。あれ今日は瞬の2歳のお誕生日だけ
ど、どうして誰もいないんだろう。ね。どうして私しかないん
だろうね」

鏡を見ている永遠江を見つめる幼児。

永遠江「ママは、誰もいないの苦手だし、無理だし、嫌だし、めちやめちやだし」

永遠江、幼児から逃げようとするが、幼児は永遠江のあとを追いかける。

窓を閉める永遠江、折り畳み傘をさして部屋を出ていこうと、ドアを閉めようとする。

幼児が永遠江を部屋の中から見つめる。永遠江、幼児を見つめて、幼児に近づく。

が、ボタンとドアを閉める。

ヒールで街を歩く永遠江、差す傘が風でおちよこになる。直してもまたおちよこに。

永遠江「……お願い」

部屋を出られない幼児が床を這う。

永遠江はおちよこを直そうとするが傘は余計に骨があらぬ方向に向き、直らない。

骨がおかしな方向を向き、イライラした永遠江がその傘をボキボキにしていく。

永遠江「……します」

その傘の動きとシンクロし、動いていた幼児が宙を舞い、床に落ちてくると一枚の布となる。

カラスが飛んでいく。

ボキボキになり果て、もはや傘の形を成さない物体を差し続ける永遠江、椅子に座っている。

太郎、永遠江の前に立ちはだかる。

太郎「ごめんじゃすまないな？ そうだよな？」

永遠江「ごめんちよつと、頭痛い」

太郎「瞬一人残して」

永遠江「明日にして。お願い、今日は無理」

太郎「なあ？」

永遠江「やること多すぎて。考えること多すぎて。ね」

永遠江、おちよこの傘を差したまま去っていく。

○元のカスミヶ丘長屋

ろの部屋のスミエ、ドアを開けたまま、中庭にいる太郎の話
を聞いている。

太郎「妻は息子を見殺しにして死なせた。それだけじゃなく、死んだことを認められずに、狂って、完全におかしくなっちゃまって。そんな妻と一緒にいて、こっちまでおかしくなりかけてて……だからあいつが、土砂崩れで行方不明になって、心底ホツとしたんです。僕は妻に死んで欲しいんです。死んでることを確認しなきゃならない。もし死体じゃなければ、死体にしてやってもいい……」

太郎、生唾を飲み込む音が響き、スミエもつられて生唾を飲み込む音。

スミエ「それで、奥さんを、死ぬほど憎んでる」

太郎「……」

スミエ「そういうこと……」

太郎「ええ」

スミエ「それは、発信、できないわけですね」

太郎「家の恥さらすようなもんです」

スミエ「でも奥さん……苦しかったかもしれないですね」

太郎「苦しかった？ やそれはあるわけないです」

スミエ「そうですか？ 私だったら、自分で見殺しにしたとしても、子供のこと忘れられなくてどうしようもなくなる」

太郎「だとしても、とてもじゃないけど……」

スミエ「話、聞いてあげなかったんですか？」

スミエ、太郎を見つめる

太郎「僕ですか？……僕は、土砂崩れ予報の開発でそれどころじゃなくて。特にあの時は忙しくて」

○回想・2年前の地盤研究所

蛍光灯のあたりが舞台上手の壁面を細長く映し出すのは、地盤研究所の一角。

回想の音楽。

ブルートウースイヤホンで誰かと電話している咲坂の元へ、

太郎やってくる。太郎もイヤホンで誰かと話している。

咲坂「……うーん足りないのよーこつちもこの雨続きで」

太郎「それは、指数の基準を動かすといいのかな……」

咲坂「でもなーあの人には足向けて寝られないし……」

太郎「ゼロに一回もってって……」

咲坂「寝られない……」

太郎「や、一か……」

咲坂「寝る……」

太郎「二か……」

咲坂「寝ない……」

太郎「ゼロか……」

咲坂「寝る……」

太郎「やっぱ一か……」

咲坂「や、そういう寝るじゃない」

太郎「そこ難しい……」

咲坂「え今のセクハラじゃないから」

太郎「思い切ってみる？」

咲坂「わ今ビクついたわ自分に……」

太郎「思いきって一回ゼロに基準もってって……うん」

咲坂「はぁームズイ、ムズ過ぎるわー」

太郎「（電話相手に）あ、ちよつと待って（太郎に）太郎」

咲坂「（電話相手に）あちよつとごめん（咲坂に）はい」

太郎「さつきさ、地盤研究所で開発中の土砂崩れ予想技術で、明日

5月15日、鬼子母神エリアでの土砂崩れが予想されてるって情

報があつて」

太郎「えっ!？」

咲坂「あなた、鬼子母神エリアに住んでんでしょ？」

太郎「ええ」

咲坂「リリースされてないから公表できないし、正確かどうかもわかんない情報だけど、念のため奥さんに社外便メールでも何でも連絡した方がいいんじゃない？ 明日は家を離れて、近づかない方がいいって。ギリギリ今日出せば間に合うでしょ？」

太郎「え？…あはい……」

咲坂「今日も明日も、帰宅できないでしょ私らこんなんじゃない」

太郎「…わかりました」

咲坂、電話に戻って

咲坂「あ、ごめん、え？ うーんそうねー…色々よ色々」

太郎、ポケットからメモを取り出し、ペンで書き始める。

太郎「（スミエに）で、僕は妻に社外便メールを書いたんです」
『永遠江へ。明日、鬼子母神エリアが土砂崩れになるという予報あり。念のため明日はそこを離れているように。こちらはしばらく泊まり込み』」

咲坂、太郎に

咲坂「今から会議だって。急いで」

太郎「え？」

咲坂「あなたに言ってるの、早く」

太郎「あ、はい」

咲坂、出て行く。

社外便の男、プラスチック段ボールを抱えて出てくる。

社外便の男「社外便、最終でーす」

太郎、書き進める。

太郎「『一日経って、何もなければ大丈夫』」

社外便の男「社外便、最終、いいですねー」

永遠江の声「どうしようか、誕生日。ロールサンドはどうかかな：チーズと海苔とぬか漬けのロールサンド」

立ちつくす太郎。

太郎「干からびる：」

社外便の男「最終便ー（太郎に気づき）あります？」

太郎「ありません」

太郎、手の中の手紙をゆっくりとくしゃくしゃに握りつぶす。

くしゃくしゃに握られる紙の音が大きく響き渡る。

○元のカスミヶ丘長屋
ろの部屋のスミエ、ドアを開けたまま、中庭にいる太郎の話
を聞いている。

太郎「渡さなかつたんですよ。書いた手紙を。予報通り、翌日の鬼
子母神エリアはあの通りです」

回想の音楽が消える。

スミエ「奥さんは子供を見殺しに、あなたは奥さんを見殺しにし
た」

太郎うなずく。

スミエ「……手紙、どうして出さなかつたんですか？」

太郎「……手紙を出さなければ、永遠江は死ぬかもしれない。あ
いが死ねば楽になれる。……チャンスだ。そう、思ってしまった」

スミエ「それって……殺人？」

太郎「殺すつもりなんてなかった」

スミエ「死ぬってことを積極的に希望したわけじゃないけれど死ぬ
かもしれないって思いながら、死んでもしょうがないって思って
手紙を出さなかつたんですよね？」

太郎「もう、やめてくれ」

スミエ「奥さんが子供残して家空けたけど、あなたも家空けてた
んですよね？」

太郎「僕は、仕事で泊まり込みだった」

スミエ「奥さんは、きつと一人きりで子育てしてて苦しくて、お
子さん死なせちゃったあとも、死にそうなほど自分を責めて苦し
くて苦しくて」

太郎「やめてくれって」

スミエ「薬飲んでまで忘れようとしているのに、なんで探している
んですか？奥さんの死体」

太郎「……0.01%、死体じゃないかもしれないんで」

スミエ「……もし生きてたら？」

太郎「泣きますね」

スミエ「もし死んでたら？」

太郎「笑いますよ」

太郎、濡れたまま下を向いてうなだれている。

スミエ、タオルを手にとり太郎の肩にかける。

スミエ「風邪、ひきますよ」

太郎「どうも」

太郎、立ち上がる。

太郎「……僕、これで」

スミエ「ええ」

太郎「おやすみなさい」

スミエ「おやすみなさい」

自分の部屋に入っただけとすする太郎、振り向く。

太郎「あの……こんな話、きいてくれて、ありがとうございます」
スミエ「いえ。話してくれて、ありがとうございます」

太郎、お辞儀をして自分の部屋へ戻っていく。

スミエ、無線機の前に座る。

電源を入れると無線ノイズ。

深呼吸する。

スミエ「おやすみなさい、と言ってお隣の太郎さんはいま帰っていきましました。……大変な状況です。太郎さんという人は」

無線機の上で頬杖をつくスミエ。

中庭を水先案内人扮する犬が通り過ぎる。

スミエ「犬……」

太郎とスミエ、窓枠から犬を見つめる。

スミエ「コールフォードッグネーム……犬の名前を募集してます」

太郎「（小声で）犬の名前か……」

スミエ「柴犬ちゃんの名前募集！」

太郎、タオルにくるまってスミエの発信を子守歌のように聞いている。

太郎の部屋のあかりがゆっくりと消えていく。

スミエ「どつぐねーむ、ぷりーず。このカスミヶ丘長屋の、中庭を通り過ぎる、柴犬の名前募集、どつぐねーむ、コールフォードッグネーム。誰か応答願います……CQ、CQ………」

スミエの部屋のあかりもゆつくりと消えていくと共に鳥の轉り音とスコップで土を掘る音が響く。

○更地

土を掘り起こしている太郎が舞台奥に浮かび上がる。

土の表面を擦り探している。

何かを見つけたる太郎、引つ張り上げると、人骨らしきものである。

太郎、骨の大きさや感触面影を確かめ、祈るようにビニール袋に入れる。太郎歩き出す。

太郎の移動と共に、舞台奥の左右に伸びる階段に蛍光灯のあたりがつく。

○社会援護局・事業課

社会援護局職員が上方から声をあげている。

職員「はいお次の方に参ります。2398番の方、いらっしやいますか？」

太郎、（はい）と階段を上がって職員に歩み寄り、ビニール袋を渡す。袋を受け取る職員。

職員「じゃ、2398番さん、こちらに記入お願いします。あと鑑定結果についてですけど、一致した場合のみ、職員が掘削場所を確認後、ご本人にその結果をお知らせします」

太郎「はい、わかっています。もう何度か来てるんで」

職員「あ、そうですね、失礼しました」

太郎、書類に記入し始める。

書き終えたと、職員別の書類を太郎に渡す。

太郎、記入し続ける。

職員「あ、えー2398番さん、先日のDNA鑑定の結果が出てますね。（書類を一枚渡す）」

太郎、紙をもらい、サインをする。

職員の声が出ている。「えー次の方、2399番の方いらっしやいますか？」

太郎、中庭の方へ歩いてくる。

○カスミヶ丘の長屋

中庭。

太郎がスミエに、紙を渡している。

太郎「先日の骨、なんですけれど。残念ながら、旦那さんのDNAと一致しませんでした」

スミエ「そうですか」

太郎「……妻の骨でもなかった……。僕は、また別の骨を見つけたんで、それに希望を託してます……。あの、大丈夫ですか？」

スミエ「何がですか？」

太郎「……」

スミエ「ヒエル君の骨じゃなかった……。ってことは、ヒエル君が生きてるといふ希望があるということですよ」

太郎「ああ、そうでしたね」

スミエ「面影が違いましたし」

太郎「……骨の？」

スミエ「骨の」

スミエ、光の中。ヒエルとの、流れ落ちる汗を受けとめ合うかのような粘性の高い戯れを思い出している。

○更地・社会援護局・ろの部屋（掘る↓鑑定↓報告）

音楽の中で、太郎の日常が繰り返される。（七つのシーンがリピートされる）

- ・ 更地で太郎が掘る
- ・ 社会援護局で太郎が鑑定依頼する
- ・ 長屋で太郎がスミエに見つからなかったと報告
- ・ 更地で太郎が掘る
- ・ 社会援護局で太郎が鑑定依頼
- ・ 長屋で太郎がスミエに見つからなかったと報告
- ・ 更地で太郎が掘る

○社会援護局・事業課

舞台奥階段の上方で、鑑定結果を待つ太郎。

職員「はい3689番さん、一致してますね」

太郎「え？ ……一致した？」

繰り返し返されていた日常の音楽が止む。

職員「ええ。先日のDNA鑑定で旅本永遠江さんと一致していますね。こちらの書類にサインをお願いします」

太郎「……一致した……」

職員「こちら一致した骨になります。こちらお返しします」

社会援護局職員が太郎に書類にサインをしてもらおうと箱を差し出す。受け取る太郎。

太郎「どうも」

職員「それと、この傘と……」

透明ビニールに入ったL字金属を見せ

職員「これ、見覚えはありますか？」

太郎「あ……それどこで？」

職員「あなたの記された鬼子母神エリア南南東2D周辺区域を、職員が確認したところ発掘された物なんです」

太郎「それは妻の……ブラジャーのワイヤーです。私が妻の誕生日にあげたL字型のブラジャーで、なんか……あいつ、L字型がいとかでそれで」

職員「お持ち帰りになりますか？ それともこちらで処分しますか？」

太郎「……持ち帰ります」

職員「はい。ではどうぞ。お疲れ様でした」

職員から渡された傘・骨・ブラジャーのワイヤーの入った段ボール箱を受け取る太郎。

太郎「あ、はい。あの……ありがとうございます」

職員「お次の方に参ります。3537番の方、いらっしゃいますか？」

太郎ゆっくりと援護局の階段を降りてくる。

○街

舞台の上を人々が往来している。

太郎が歩いてきて立ち止まり、箱を開ける。中から、泥まみれのブラジャーを手に取り匂いを嗅ぐ。

そのブラジャーが、水先案内人によりふわりと宙を舞う。あとを追う太郎。ブラジャーを取り返し、箱へ取り戻す。遺骨の小さな一部を手取る。今度はその骨が宙を舞う。追いかけて、箱へ取り戻す。やり取りが続き、箱の中身を取り返し、守るようにならずくま。ようやく箱から逃げない事を確認する太郎。

太郎「……俺、これ探してたんだったよな……」

太郎、段ボールを抱えて立ち上がると、そこは長屋。

○カスミヶ丘の長屋

無線ノイズが聞こえているろの部屋のドアを、段ボールを抱えた太郎、ノックする。
トランプをしていたスミエが立ち上がる。

スミエ「誰か来た……。多分」

ドアをあけるスミエ。

スミエ「人間だと思えばいい……」

太郎「あの、その無線機お借りしてもいいですか」

スミエ「え」

太郎「あなた、僕に発信しろ発信しろって言ったじゃないですか」

スミエ「あ、ええ。いいですよと、私は答えましたが……」

スミエ、無線機の椅子を太郎に譲る。

スミエ「でも急に、またどうして？」

太郎「拾った骨が妻のものだと判明しました」

スミエ「え、それは良かった、良かったでいいのでしょいか」

太郎「いいのかどうか。言葉にしてみようと。あ、勝手にこつちでやっていますから、オセロ、続けててください」

スミエ「はい……はい」

太郎、頭を掻きむしる。

無線機を見つめ、スイッチを入れてみる。

太郎「これは……こうか？ これは……こつちか……」

スミエ「(太郎の後ろから)あ、スイッチはこちら。こうして、これは、こうで。はいこれでもう、繋がってます」

太郎「あ、どうも。あの、どうぞそっちはそっちで、続けてください」

スミエ「わかりました、と答えましたけど、この方に喋りのスキルがあるのでしょいか？」

太郎、咳払いして

太郎「あ：あ：、本日は晴天なり。いや本日は曇天なり本日は曇天なり」

スミエ、少し離れてトランプをはじめめる。

太郎、無線機に貼られたアルファベットを見つけ

太郎「CQCQ?か、こちらえーJAJAWP、カスミヶ丘長屋のJAJAWP。誰か聞いてるんですかねこれ? えーどこかと繋がってますか? 応答願います。えー」

水先案内人扮する野良犬が通り過ぎる。

太郎「あ、野良犬。えー、犬の名前を募集してます。あ、行っちゃった、あれいたよな? 今?犬」

太郎とスミエ、立ち上がり、窓の外を眺める。

太郎「まあいてもいなくてもいいか、犬なんて」

スミエは、太郎の発信を聞きながら、静かにトランプに目を移す。

太郎「あ、えーと、今日、僕の行方不明だった妻が、死んでいたことが判明しました。この二年、ずっと妻の生きてる姿じゃなくて、あいつの死体を探し続けてまして。あ、っていうのも、実は僕は妻をこの世で最も憎んで、や、憎んでると思ってたんですよ。だから、遺骨が見つかったら、笑おうと思ってたんですよ。さっきまでは。そう、俺いつだったか誕生日プレゼントでL字型のワイヤーブラジャーってのをあげたことあって、あいつ、いつも胸の形に悩んで、あ、普通はあれ、U字型のワイヤーらしいですね。だけどL字型ってのがあって。で、それがあいつの胸の

形に良かったみたいで。あげたときスゲー喜んでくれて。でそのあげたやつ、あいつ、死んだ時もちゃんとそれつけててくれて：：：なんか、死んだってわかったらわかったでやっぱり生きてくれたらなああって。もう一度ちゃんと瞬が生まれる前のあいつに戻って、いや、俺がちゃんと戻してやれてたら：：：、でももう、死亡が確定したからには、もう何も言えないし、聞けないし、触れないし、なんて思ってる。何なんだよもう、この感じ：：：。CQ、CQ、こちらJA1AWP。旅本永遠江、という人を探してます、いやました、中肉中背です、でした。眉毛の横に大きなほくろ、二重まぶたで顔は面長：：：でした。：：：これといって特徴はなくて：：：ですね」

スミエ、トランプを並べている。

太郎「あいつが作ろうとしてたサンドイッチは、チーズに海苔にぬか漬けで、もう完全に頭いかれてるって思ってる」

スミエ「結構そのサンドイッチいけると思いますが」

太郎「まさか」

スミエ「三つ星シェフが考えそうなレシピじゃないですか」

太郎「：：：あいつが、『どこか行くの』って俺を非難する声で呼び止めたとき、あいつの目見えないようにしてた。もう完全に狂ってるって思ってたし。考えなくなかった。でも：：：視界のすみにあつたあいつの目」

太郎、立ち上がる。

太郎「（思い出しながら）俺を非難する狂った目だったよな：：：いや俺に助け求めてた？」

太郎がぼーっと歩き出すとそこは雑踏。

○街

人々が往来する中をぼーっと歩く太郎。
遠くから女を呼ぶ男。

男「タマエー」

女「んー」

男「タマエー、先行ってるよー」

太郎「トワエ？：：：永遠江！」

女「今行くー」
男「タマエ、早くー」
女「待ってよ」

女、男の方へ歩いて行く。
太郎、女を追いかける。

太郎「永遠江………」

女、雑踏の中に紛れる。
太郎、ぼうっと追いかける。
永遠江が消えては現れる。

永遠江「どうしよっか？ 誕生日……どこか行くの……雨、降って
るけど……行くの？……行っちゃうの？」

太郎「永遠江待って、行くな、悪かった……」

永遠江「誰もいないの苦手だし、無理だし、嫌だし、めっちゃめっちゃ
だし」

太郎「見ないふりして……永遠江……待って」

永遠江「……お願い」

太郎「待って」

雑踏の中を太郎、永遠江にぼうっと近づいたり離れたりする
が見失ってしまう。
一人取り残される太郎。座り込むとそこは元の長屋。

○元の長屋

ろの部屋でうなだれスミエの椅子に座り込み、頭をもたげて
いる太郎。

スミエ太郎の背中に手を置く。太郎、取り乱したことを恥じ

太郎「すいません……すいません」

佇む二人。

○地盤研究所

蛍光灯のあかりが舞台上手の壁面を細長く映し出すのは、地
盤研究所の一角。

咲坂が、ブルートゥースイヤホンで誰かと話をしている。

そこへ太郎もイヤホンで誰かと話をしながら入ってくる。太

郎の方は独り言である。

太郎「何でだろう……」

咲坂「（電話相手に）まあ、あるよねーひとつそういうのはさ」

太郎「何でだろう、なんで」

咲坂「境目がムズイんだよねー」

太郎「もつと早く気づくことができなかつたのかつて。もう自分責めるしかなくて」

咲坂「どっちの足向けて寝るかもねー左足か右足か：やームズイ」
太郎「でも、もう、責めても仕方ないことだし……どう考えたつて」

咲坂「ムズイわーだって連れ××してた仲だよ？　それが偉くなつちやつてさ……」

太郎「まああんまり、そういうのやめにしたいし、でもやっぱり、そうするしかない自分がいて、でももう、責めたくないし」

咲坂「え気使いすぎハラコメント？　かもね。かもしれない私。気つけよう。そう右足。またこむら返り。もお
（太郎に気づき電話相手に）あ、ちょっと待って」

咲坂、太郎に話しかけようとするが太郎の様子を見て、しばし眺める。

太郎「しょうがないんだよ、どんな事したってどんな風に考えたつて、もうそれは」

太郎、電話の相手はおらず、どう見ても独り言。

咲坂「太郎それって、もしかして……」

太郎、咲坂に独り言を気づかれたことに気づく。

太郎「……だめですか？」

咲坂「……いいよ」

咲坂、うなづく。

太郎もうなづく。

咲坂電話に戻ろうとして思い出し

咲坂「あ、そうそう。今さ、うちの予報技術で、明日、カスミヶ丘エリアでの土砂崩れが予想されてるって」

太郎「は？ また俺んちの近く？！」

咲坂「引越したの、カスミヶ丘だったでしょ？」

太郎「はい」

咲坂「開発中だから公表出来ないけどさ」

太郎「まあ、でも：うちに荷物はほとんどないっちゃないんで」

咲坂「そっか」

太郎「今日はこれから：中部エリアに出張ですし」

咲坂「（通話相手に戻り）あそこのバナナがいいんだ。こむら返り？ カリウムか。ぬかるみ多いからねー」

咲坂、電話の相手と会話を続け、太郎も独り言を続ける。

太郎「…：やっぱりやってかなきゃなんないんだろうなああって」

社外便の男、プラスチック段ボールを抱えて出てくる。

社外便の男「社外便です、ありますか？」

太郎、迷う。

太郎「あの！ 出します」

ポケットからメモを取り出し、ペンで書き始める太郎。

太郎

『スミエ様。明日、開発中の土砂崩れ予報でカスミヶ丘エリアに土砂崩れ予報あり。念のため明日はそこを離れたほうがいいと思います。一日経って、何もなければ大丈夫…』

社外便の男「社外便、いいですねー」

太郎「待ってください。『僕は出張で不在にします。隣人太郎より』」

書き手紙を封筒に入れ、封をする。

太郎、社外便の男に、手紙をきっちり手渡す。

社外便の男「はいじゃお預かりします」

太郎「ほら！ ほら渡した確かに！」

社外便の男が、手紙を受け取り、出て行く。

太郎「わかってるよ何の罪滅ぼしにもならないなんてこと」

○街

太郎が走り出す。徐々に全速力で。

太郎「でもせめて」

舞台奥、左右に伸びる階段に蛍光灯のあかりがつく。

○社会援護局・事業課

上方から声をあげている社会援護局職員。

太郎、階段を駆け登り職員のところへ。

職員「はい2418番の方、いらっしゃいますか？」

太郎「あの」

職員「はい2418番さんこちらに記入……あれ？ あなたは？」

太郎「搜索センターシステムの方で確認したい人がいるんですけど」

職員が差し出そうとするタブレットを太郎むしり取り、階段を降りて走り出す太郎。

○ふたたび街

歩く人々。

そのあいだを縫って、太郎走っている。

音楽が高鳴る。

群衆の中、人を探す太郎。

女と歩く男。

男を後ろから追いかける太郎。

男を追い越し、前から確認する太郎。

再び後ろに回り込み、後ろから追いかける太郎。

人違いを繰り返す。

太郎、ある男に近づき、肩を叩く。

振り向く男。

太郎「あのちよつとすいません。一緒に来ていただけませんか」

男と対面している太郎。

闇の中、スミエの発信する声が音楽に重なる。

スミエの声「えー、J A 1 A W P、かすみヶ丘のJ A 1 A W P、しばらくぶりに戻ってきましたが、この部屋もカスミヶ丘も無事でした。予報が出たと聞いたときには驚きましたが、あたらないで、ホント良かったです。この長屋もこの部屋もいつも通りです。……」

○カスミヶ丘の長屋

実況するスミエの姿が見えてくる。

ろのスミエの部屋を、太郎、ノックする。

スミエ、ドアを開ける。

太郎、振り返り、男を呼び寄せる。

男が来て、太郎の前へ出る。

スミエと対面する男、ヒエル。

音楽止み、静けさが漂う。

ヒエル「スミエ」

スミエ茫然と後ずさりする。

無線機の前へぎこちなく座って何事もないように

スミエ「そんなワケワケで、このアパートもまあ……ははの杉杉崎さんももういなく」

ヒエル「いろいろ、ごめん。申し訳なかった……新しい生活が軌道に乗ってて」

スミエ「こちらJ A 1 A W P J A 1 A W P Q R S T U V W X Y Z A B C D……」

ヒエル「土砂崩れが起こって、黙っていなくなったことは本当この通り、謝る」

頭を下げるヒエル。

ヒエル「だから……」

スミエどこから傘を出して差し、ヒエルから自己防衛しながら

スミエ「犬犬がね、通るんですよここは」

太郎「スミエさん？」

スミエ「犬の名前を募集してるんですよ」

太郎「（ヒエルに）あの……（あなた）ヒエルさん……ですよ？ 違

うんですか？」

ヒエル「違わないですよ」

スミエ「(太郎に) 違うんで」

太郎「え？」

ヒエル「(スミエに) 違わないだろ？」

スミエ「太郎さん違うんで」

太郎「違う……？」

スミエ「ヒエルと名乗る人間が来ましたが、私の探しているヒエル

君とはまるきり断じて違うもようでした。S T U V W X Y Z」

太郎「……違う？」

スミエ、実況発信を続ける。

ヒエル「ずっとそうやって、発信してるんだ……」

スミエ「あ、犬そう犬犬の名前でしたね。このあたりはたまに鹿も通るんですけどね、鹿の名前も募集しようかと思っただですよ、鹿の名前も募集しようかなしてもいいかな」

太郎「(代わりに答え) そうですよ、毎日毎日、旦那さんに呼びかけながら。……(ヒエルに) 旦那さんですよね？」

ヒエル、頭を搔く。

ヒエル「(スミエに) ……終わってたよな？」

スミエ「犬の名前と、鹿の名前と両方募集しましょう、どなたか、

コールフォードッグネーム、コールフォーディーアーネーム」

ヒエル「とつくに」

太郎「あのう、スミエさんがずっとあなたを探していたの、ご存知じゃなかったんですか？」

ヒエル「俺と一緒にいたときから、探してましたよ」

太郎「え……」

ヒエル「とつくに関係が変わってるのに、……いや変わったからか。一人でブツブツ話して目の前に俺いんのにマイク使って探し始めて。それさ、出会った頃の俺を探してるってこと？ でもいまだにこんな風に発信してるなんて……まさかだよ」

スミエ「まさか？」

ヒエル「え？」

スミエ「まさか」

ヒエル「は？ あ、あのさ、土砂崩れの前の日に渡したヤツ、あれ、まだ出してくれてない……よね？」

スミエ「まさかだよ」

ヒエル「は？」

ヒエル軽蔑心を自制し、太郎に同情を求めるが為す術なく。

ヒエル「な、土砂崩れの前日にほら、渡してあった」

スミエ「ずっと子供できないからって若い女と子供が出来たと渡された離婚届なら、土砂に埋まったけど？」

ヒエル「お、そうだったか。そうか。あの、じゃ、今度新しいヤツ送るから。希望や条件あれば、そんなに入れて、一緒に送って欲しい。まあ、もしいろいろ希望とか？ あれば、それは聞くし。な。出してくれないとさ、ほらこっちももう、子供二人いるし」

ヒエル、もう一度頭を下げる。

頭を上げ、スミエの部屋を見回すヒエル。

ヒエル「うわあ。変えてないんだ、鬼子母神の時の部屋の配置も何もかも。へえ〜」

ヒエル、スミエの部屋に一〜二歩入って行こうと

スミエ「消えろ化け物お！！ 私は何もしてない」

驚き、後ずさりするヒエル。

太郎、小声で『消えろ化け物、私は何もしてない』をなぞる。

ヒエル「こわ」

太郎「スミエさん……」

ヒエル「（小声で）本当むり」

太郎「違う。違った。やっぱり違った。スミエさん、ヒエルさんてどういう特徴でしたっけ？」

スミエ「……中肉中背。左頬にほくろ、大きめの一重で耳も大きめ」

太郎「やっぱり違った」

ヒエル「は？」

太郎「ごめんなさい。僕の勘違いだ。すいません、ごめんなさい。勘違いでした」

ヒエル「いや違わないよ」

太郎「今日はもう、どうかお引き取りください」

ヒエル「何なんだ？ あんたまで」

太郎「どうかもう、このまま。どうぞもう」
ヒエル「わかった帰りますよ」

ゆっくりと二人から後ずさりするヒエル。

ヒエル「じゃ、頼んだよ。お願いします」

ヒエル、去っていく。

無言の二人。

太郎、スミエに何か言おうとするが、言葉が出てこない。
スミエ、何度か咳払いしてから

スミエ「こちらカスミヶ丘のJ A 1 A W P、えー今、あの人が姿を現しました」

太郎「……すいませんなんか、余計なこと、しちゃったみたいで」

スミエ「……発信すると、気が紛れるんですよ」

太郎「そうですよね。わかります」

スミエ「スピードの六、暗雲立ちこめ決別、か」

所在なげな太郎

スミエ「……本当は別に探してなんかいないんですよ私」

太郎「ええ。……簡単に見つかりました」

スミエ「独り言言い始めたの、土砂崩れの前日、あの人が紙渡してきてから。勝手に行方不明にして発信し始めたら、色々、吐き出せるようになって。やめられないというか、お恥ずかしいとか」

太郎「……僕ね、妻が死んだってはっきりした途端、なんか、悲しくて泣けてきたんですよ。あれだけ死体探して死体が見つかったら笑うかと思ってたのに、実際見つかったら、普通に泣けてきちゃって。恥ずかしいの僕の方です」

スミエ「太郎さん、ありがとうございます。手紙」

太郎「え？ あ、ああ。手紙ね。あれ、職場で開発中のやつで、このカスミヶ丘辺りがそういう予報が、また出たものですから……でも、予報当たりませんでした。すいません」

スミエ「いえ」

太郎「まだまだ開発が必要なんだよな……」

スミエ「私には出してくれたんですね、手紙」

太郎「ええ、まあ」

スミエ「私この二年、ずっとここで死のうと思ってたんですよ。こ

こで、こうしてるしかないし他にもう何もすることないし。仕事もなくたって色々あった夢も諦めて。この部屋だけが私の居場所。この警戒エリアで土砂崩れがくるのを待ってました。土砂に巻き込まれてこの世から早く消えたいって。でも、お隣さんから手紙もらって、逃げたんですよね私。待ちに待った土砂崩れが来るかもしれないって教えてくれたのに、私、この部屋から逃げたんです」

太郎「これ以上、死なせたくない人を死なせる事は、僕には出来ません」

スミエ「……私まだ生きてやろうって思ってるみたいです」

スミエ、マイクのコードを無線機から引っこ抜いてみる。
スピーカーから無線ノイズが響いている。

太郎「スミエさん、式あげませんか、一緒に」
スミエ「……」

雨が降ってくる。

中庭に出て、水先案内人が降らす雨を全身に浴びるスミエ。

埋葬のための穴が出現する。

スミエは部屋に戻り、無線機器類、写真立て、スピーカーを順番に部屋から持ち出し、その穴の中へと入れていく。

太郎も、自分の部屋から、永遠江の遺品である傘・ブラジャー、そして遺骨、マトリョーシカを順番に持ってきて、その穴の中へと、厳かに入れていく。

太郎は、傘・ブラジャー・遺骨・マトリョーシカに静かに砂をかけていく。

スミエは、無線機に、そして無線機からノイズが出ているスピーカーに、静かに砂をかけていく。

二人、交互に、それぞれの遺品に静かに砂をかけていく。

無線機スピーカーから聞こえていたノイズ音が、かけられた砂により、ゆっくりと次第に小さくなっていき、次第に消えていく。

静寂が二人を包む。

スミエ「あなたには色々とお世話になりました。ご冥福を心から祈っていただきます。式をこういう風にあげるのってやっぱり気持ちに区切りをつけるって気がしますね」

太郎「誰に話してるんです？ それ」

スミエ「……口癖です。気にしないでください」

スミエと太郎、花を穴の中へ手向ける。

参列者（水先案内人）たち、集まってくる。

太郎、参列者に向かつて

太郎「皆さん、本日はお日柄も良く、ご会葬を賜り、誠にありがとうございました。うございます。妻は二年前の土砂崩れで帰らぬ人となりました。享年四十三歳でした。生前ご厚誼を賜りましたことを、故人に代わってお礼申し上げます。ささやかですが、宴の席を設けますのでおかつろぎ下さい。どうか、心ゆくまで」

参列者たちも花を手向けると、宴のテーブルへ歩いていき、杯を交わし始める。

蝶が舞っている。

祭りの宴のよう。

太郎とスミエもその輪のなかへ歩いていく。

幕